

都市空間の再編における空間計画手法

ランドスケープ・プランニングからのアプローチ

SPATIAL PLANNING AT THE PHASE OF URBAN TRANSFORMATION Study with the perspective of Landscape Planning

小浦 久子 芸術工学部環境デザイン学科 教授
長濱 伸貴 芸術工学部環境デザイン学科 教授
畑 友洋 芸術工学部環境デザイン学科 准教授
萬田 隆 大学院芸術工学研究科 准教授

Hisako KOURA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Nobutaka NAGAHAMA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Tomohiro HATA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Takashi Manda Graduate School of Arts and Design, Associate Professor

要旨

変容する都市の市街地再編における空間計画からのアプローチによる都市課題の広がりやプランニングの役割を探る検討を続けている。2018年度は、1) ツォルフライン（世界遺産地区）を開き、周辺地域と連携するための提案を求める日独米学生デザインワークショップを通じた“Urban Integration”のあり方、2) 第3回TCR（Transforming City Region）国際シンポジウムにおけるプランニングの実践と理論の議論を通じた地区と広域のスケールと時間と分野をつなぐ計画課題、3) 分担者の実践にもとづく個別のデザインとプランニングの相互作用、について議論した。

当初、都市の再編においてパブリックスペースの構成に着目し、広義のランドスケープ計画により地区（ローカル）と広域（リージョン）を編集創発する計画論をめざしたが、上記3つの取り組みからは、a)、水、緑、モビリティなどのネットワークの再編が地区の開放と連携をうみだす、b) 地域情報のアーカイブやその地域での共有化が実践のマネジメントにつながる、c) 個別の実践と都市の再編や広域の文脈につながるためのプランニングでは、ルール地域のマスタープランで提起された“Leitplanke”型が創発を担保するのではないか、ということを指摘することとどまる。

Summary

The study on planning issues and planning role in the process of urban transformation has been continued with the perspective of spatial and landscape planning. In 2018, we advanced the discussion on 1) “Urban Integration” at the student international workshop to propose the idea for integration of Zollverein to neighboring districts, 2) “Town Scale Urbanism” at TCR conference through good practice and theoretical concept, and 3) “interactive design” of project design and urban planning through practice.

The study started focusing on the potential of public space for urban reorganization, and aim to reach planning concept to inspire and incorporate local changes within the regional context. We, however, could no more than propose followings: a) networking of such as greenery, water and mobility could integrate districts with opening each of them, b) archive of the local characters and sharing them would generate practical management of projects, c) the concept of “Leitplanke” in Ruhr master plan proposal might work as the regional planning framework to inspire and incorporate local activities.

1. 研究の構成

人口減少と高齢化による人口構造の変化、産業構造の転換などが、新たな地域のあり方を求めている。これまで、広域と地域の計画の連携、フリンジの変容における計画課題を検討し¹⁾、今年度は、空間的・社会的・機能的に断片化する都市状況において、ランドスケープ・プランニングから「つなぐ」計画の考え方を検討することとした。

先行して縮退への対応を進めてきたドイツ・ルール地域での都市再生への試みのなかで確認されてきた新たな計画課題を、ワークショップや国際会議を通じて検討し情報化するとともに、得られた知見を神戸での計画実践において適用する可能性を構想する。

こうした課題設定に対して、1) ツォルフェライン世界遺産地区と周辺地域との連携を生み出すデザイン提案を求める国際学生ワークショップで設定した計画コンセプトである“Urban Integration”、および2) 国際シンポジウム TCR (Transforming City Region) における都市空間再編の実践と計画に関する事例検討にもとづく計画課題の議論にもとづき、変容する都市の空間構成を組み立て直すときの計画課題を検討する。合わせて3) 分担者の実践にもとづき、個別のプロジェクト・デザインと都市や広域のプランニングとの関係についての論点を明確にすることを試みた。

2. Urban Integration

2010年 OMA により策定された世界遺産ツォルフェラインの整備計画では、遺産サイトの緑化が広域の緑とネッ



図 1. 世界遺産サイトと近隣地域の緑ネットワーク

トワークすることによって近隣地区と繋がれるとしているが、遺産サイトを囲む緑には出入り口が見当たらない。

ワークショップではこの計画を批判的にとらえ直し、遺産サイトを地域に結びつける空間デザインと戦略的マネジメントを提案することを求めた。日本(神戸芸工大²⁾・京大)、ドイツ(ドルトムント工科大・アーヘン工科大)、米国(ミシガン大)から30名の学生が参加し、各国学生が混在する6グループでワークショップを実施し、提案をまとめた。

□グループ1「公正・未来・食」

食がコミュニケーションを誘発し、現状は分断されている空間・文化・仕事・暮らしを包摂する。放置された空地で畑をして収穫し市場で売る、料理を通して文化を学習するなど、食によりアクティビティを連鎖させる。

□グループ2「糸と結び目」

近隣と広域をつなぐ新しい自転車ネットワーク整備。その結節点に地域性に応じた小さな拠点施設(屋外図書館・シェアハウス・仮設店舗・ピクニックなど)を挿入する。

□グループ3「アート・ハント」

地域性を強化し日常のアートを発信する。アートの発信を通じて地域空間とツォルフェラインを使いこなすことにより使い方の選択肢を生み出し、開放する。

□グループ4「青の糸」

今ある緑と水の基盤を再生する。歴史的産業遺産でもある水系で点在する地域資源をつなぎ、場所に機能を付加して開放していくことにより、多様な社会性をつなぐ。

□グループ5「コモン・グラウンド」

近隣コミュニティごとに学び合いのネットワーク(庭・家ラボ・オフィス等)づくりによる分散型の学びの風景を創出する。その中にツォルフェラインを組み込む。

□グループ6「断片の侵入がつなぐ」:

断片化したアクティビティルーム(ガーデニング、バーベキュー、ミーティング、マーケット)を空地や緑地に侵入させ、空間利用のガバナンスにより空地緑地を開放する。

これらの提案からは、“Urban Integration”は物理的に開放するというだけでなく、食や学びといったテーマ型のアクティビティ・ネットワークにおける役割分担や

機能連携、情報発信による場所のメッセージの転換、ガバナンスや使いこなしにより使われていない場の開放をデザインすることが、分断された地域や場所をつなぐ可能性があることがわかる。

3. Transforming City Region

TCR 国際シンポジウムは、行政区画とは異なる地域的まとまりと多核的都市構造をもつルール地域における計画課題を、各地で発生する都市空間の変容に求められる計画課題と相互検証することから始めた。都市をめぐる環境・社会・経済・技術の課題が大きくパラダイムシフトするなかで、革新的で戦略的なプランニングが求められている。2018年はUrban Integrationをテーマに、「多極性・マルチスケール空間モデル」セッション、「レジリエンス・多様性と包摂性」セッションを行った。それぞれ7名の事例報告をもとにディスカッションを行い、まとめセッションで論点を探った。小浦が「多極性・マルチスケール空間モデル」セッション³⁾とまとめセッション⁴⁾のメンバーとして議論した。

プランナーが主であるが、歴史、エコロジー、技術、文化など多様な分野の報告もあり、多面的な展開となった。まとめセッションでは、「異なる分野からの都市の認識」「アーバンデザインにおける地域-広域関係」「都市に関する知識移転とプロジェクトマネジメント」が論点となった。変容する都市域では、個別の計画と広域との関係におけるマルチスケール戦略が必要。計画は都市の変容に対する介入であり、常に政策や意思決定と関わり、計画技術だけではいけない。分野を超えて都市の知見をいかに伝え共有するかが、これから重要になるとの認識が共有された。

4. Tow-Scale Urbanism : まとめ

建築、ランドスケープ、都市の専門から個別のプロジェクト・デザインを行うにあたって、それぞれの場所における計画はどのように認識されているのか。法定都市計画は都市空間を示す機能をもたず、直接敷地条件へつながることから、個別プロジェクトをつなぐ役割を持たない。景観計画は個別敷地単位の変化をつなぐ意図を計画としては

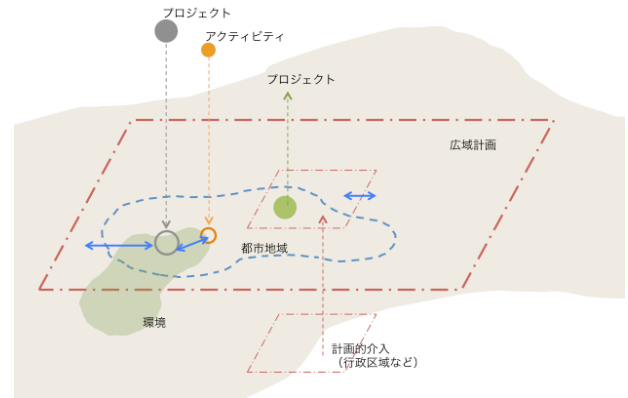


図2. 複数の空間スケールをマネジメントする

持つが、基準は敷地単位となることから運用での調整となり、実効性は厳しい。敷地と都市のスケールをつなぐことも困難な状況において、この研究グループで取り組んだ神戸市都心の空間デザインの検討においては、道路空間を都市軸とデザインすることにより、沿道プロジェクトにおけるパブリックスペースのデザイン調整によるプロジェクト管理の可能性とそのためプラットフォームとしての計画を提示した。

このとき何を定めるべきかにおいて、ルール地域のマスタープランで提起された“Leitplanke”の考え方を議論した。直訳すると「ガードレール」である。マスタープランでは基準やガイドラインではなく、社会実験や利用からのプロジェクト計画などの考え方が示され、過ぎてはならないところを設定する計画の考え方と理解した。この幅を何でもって設定するのは検討課題であるが、マネジメント型のプランニングのあり方の1つと考えられる。

これからの都市空間の変容は、プロジェクトだけでなく、空地化や既存の場所の使いこなし、生活空間の入替など、変化のマネジメントと複数の空間スケールをつなぐ計画が必要である。既存法制度には設定されていない計画であり、そのガバナンスから考える必要がある。

<注>

- 1) 小浦久子他、「オープンスペース類型からの都市空間再編の計画デザイン論」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学2017』、2017、「持続可能な都市空間再編への計画デザイン手法」神戸芸術工科大学紀要『芸術工学2018』、2018
- 2) 神戸芸工大からは修士課程1年5名が参加
- 3) H.Koura “Critical Transformation at the Urban Fringe – Conflict Between National Energy Policy and Local Environmental Value”
- 4) まとめセッションには、米国2名、ドイツ2名、日本1名のプランナーが参加した。